

『宇治拾遺物語』第三話の特質

——韓国昔話「瘤取爺」を対照させて読む——

金 恩 愛

はじめに

『宇治拾遺物語』（以下『宇治拾遺』）は、鎌倉時代に成立した世俗説話集である。総数一九七の説話の中に、いわゆる「隣翁型」の説話は、第三話「鬼に瘤取らるゝ事」と、第四八話「雀報恩事」との二話が載せられている。第四八話については、すでに考察したことがあるので、これに続き、本稿は第三話について検討したい。

この第三話の特質は、韓国昔話と比べて、鬼が男の瘤を取ってくれることや、男の真似をした隣人が瘤を取られるという枠組みでは共通するものの、鬼と人との出会いかたには、随分と異なる設定が認められることである。例えば、男が美しい声で歌うとトケビから呼び掛けられるという韓国昔話設定は、日本昔話や『宇治拾遺』には認められない。そのかわり、舞いや踊り、宴が不可欠であ

る。

本稿は、従来あまり取り上げられることのなかった韓国昔話を、新たに対照させることによつて、日本昔話だけでなく『宇治拾遺』第三話がどのような特質を備えているかを明らかにしたい。

一 日本昔話「瘤取爺」の分類と『宇治拾遺』第三話

『宇治拾遺』の研究史からみると、例えば『新大系』「類話一覧」がまとめて示しているように、第三話には、表現や構成において一致の認められる同話（1）に該当する事例がなく、同話（2）として鎌倉時代の『五常内義抄』だけが指摘されている。つまり第三話は従来、比較に適した類似の説話の少ない事例とされてきた。むしろ「類話・関連話」として、江戸時代の『醒醉笑』『嬉遊笑覧』などの他に、中国の『産語』、『笑林評』などの存在が指摘されている。

と同時に、昔話の存在については『日本昔話大成』一九四「瘤取爺他」が例示されている。^②要するに、昔話との比較研究は、説話文学研究の領域では未開拓の分野であるといえる。

それでは、昔話「瘤取爺」から『宇治拾遺』第三話にどのように迫れるであろうか。大島建彦氏は、日本各地に分布する「瘤取爺」一六〇余の事例を集め、「ほぼ一定の型がひろく伝えられており、『宇治拾遺』などの記録とも、かなり一致を示している」と指摘されている。^③とはいえ、昔話と説話集『宇治拾遺』との関係は、そう単純ではない。すでに『日本昔話名彙』では、完成昔話の「動物の援助」に、『日本昔話集成』と『日本昔話大成』では、本格昔話「隣の爺」に「一九四 瘤取爺」として分類されている。さらに『日本昔話通観』では、「隣の爺」型のひとつとして「鬼の楽土型」・「鼠の楽土型」・「地藏浄土型」、「異郷訪問型」という亞型が示されている。

私は、日本における昔話「瘤取爺」の採録事例一四七例を確認したが、その検討の詳細については、紙幅上省くことにしたい。

日本説話『宇治拾遺』第三話と昔話との関係については、かつて中島悦次氏が「この話は多分当時民間に語られていた話を記録したものである^④」と述べている。だが、第三話を、単純に昔話をそのまま記録したものだと思えることは難しい。なぜならば「宇治拾

遺」の説話において、昔話に何が書き加えられたのか、何が書き換えられたのかを明らかにする必要がある。また、大島建彦氏は第三話の注釈において、「瘤取爺」の昔話に当たるものである」と慎重に述べて、昔話と説話とが「型」において同じであるという。^⑤ただ、その後『宇治拾遺』の注釈においては、昔話と説話との同一性ばかりが強調され、両者の相違はほとんど問われなかった。

そのような中で、周知のこの日本昔話を対照させることによって、『宇治拾遺』第三話は「横座」を中心に構成される平安貴族の饗宴や、時代に流行した「一庭を走まはり舞ふ」猿楽が描き加えられていることがすでに明らかにされている。^⑥そこで、私は、最近まであまり紹介されなかった韓国昔話を対照させることによって、『宇治拾遺』のもつ特質を新たに明らかにしたい。

二 昔話「瘤取爺」に関する日韓の研究史

さて、韓国における「瘤取爺」については、古くから朝鮮中期詩文集『睡隱集』卷三「瘤戒」に類似する事例の存在することが知られている。^⑦しかし、その採録は、舜首瘞という日本の僧侶から聞いたと説明が付けられているため、韓国固有の伝承とは言えない。その後、韓国昔話「瘤取爺」の典故として「旁苞説話」（もしくは、「金錐の話」「金錐説話」ともいう）が指摘されてきた。「旁苞説話」

は、『西陽雜俎』続集卷一「支諾臯上 鬼神妖怪の記録拾遺上」、
『太平御覽』卷第四一、「東史綱目附卷」怪説弁證」などに掲載さ
れている。高木敏雄氏は「旁詛説話」を取り上げ、『宇治拾遺』「瘤
取爺」と比較して、次のような共通点を取り上げている。要点を示
すと、

- 1 山中で鬼に遇うこと。
- 2 鬼が集まって宴会を開くこと。
- 3 両人が同一視されること。
- 4 その人が顔面に罰を受けること。

などである。さらに高木氏は、『西陽雜俎』説話の発端「新羅国有
第一貴族金哥。其遠祖云々」の句が、この話の源地を暗示すると
して、『宇治拾遺』第三話と「同一の起源を有している」と述べ、
「朝鮮半島方面」から一方は中国大陸へと伝わり、一方は海を渡っ
て日本へ伝わったと推測している。また島津久基氏は「舞ふ代りに
美声で歌ふだけの違いで、『宇治拾遺』説話に一層近い」として
『西陽雜俎』を「同始源」もしくは「類種の説話からの変形に「打
出の小槌」の形式を採る如意宝」のモチーフが含まれて来たもの」
と述べている。さらに野村八良氏は、「瘤取爺」の典故として仏説
「譬喻譚」からの影響を述べた上、高橋亨氏の「瘤取」を取り上げ
「宇治拾遺」と「同一源泉の物」と主張している。一方、日本に

韓国の昔話「瘤取爺」の存在が紹介されたのは、高橋亨氏が最初で
ある。^①そのため、韓国の研究者の中には、「植民地時代に日本から
輸入された話」だとする説もある。^②

一方、韓国固有の伝承とみる説もある。^③

このように日韓の伝承のいずれにしても、従来の考察は、源泉に
ついての言及や出典など、影響関係に関する指摘を主にしたといえ
る。私は、そのような蓋然性に終始する議論を一旦留保して、まず
日韓の比較から始めたい。

三 韓国昔話の採録資料

崔仁鶴氏は、韓国昔話「瘤取爺」四七六「瘤取爺型」^④に分類す
る。『韓国口碑文学大系』（以下、『韓国口碑』^⑤）には、類系分類63
4-9「トケビのおかげで得をした人、真似して失敗する」に、総
数六話（⑮～⑳番事例）が収録されている。昔話集及び『韓国口
碑』に収録される総数二〇の採録の報告事例を取り上げると、次の
ようである。

- ① 高橋亨「瘤取」『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房、一九一〇年、
一～五頁。

- ② 榎本秋村「瘤爺」『世界童話集東洋の巻——（第二部 朝鮮童
話）』実業之日本社、一九一八年、四八～五一頁。

③山崎日城「瘤取物語」「朝鮮の奇談と伝説」ウツボヤ書房、一九二〇年、二一〇～二二三頁。

④朝鮮総督府「三、瘤とられ、瘤もらひ」「朝鮮童話集」朝鮮総督府刊行、一九二四年、一三～一八頁。

⑤沈宜麟「43、瘤のある老翁」「朝鮮童話大集」漢城図書、一九二六年、二〇四～二〇七頁。

⑥中村亮平「瘤取爺さん」「朝鮮童話集」富山房、一九二六年、九九～一〇六頁。

⑦朴英晩「18、瘤取られ、瘤もらい」「朝鮮伝来童話集」ソウル、一九三〇年、九九～一〇三頁。

⑧朝鮮総督府「第八、瘤を取った話」「朝鮮語読本巻四」朝鮮総督府刊行、一九三三年、一九～三〇頁。

⑨李相魯「瘤取りに行つて」「韓国伝来童話読本」乙酉文化社、一九六二年、一七八～一八三頁。

⑩李元寿「歌の袋」「伝来童話集」現代社、一九六三年、二六六～二七七頁。

⑪崔仁鶴共編「瘤取に行つて、瘤付けられた者」「韓国伝来童話全集1」章原社、一九七〇年、六五頁～七〇。

⑫任哲宰「昔話選集」教学社、一九七二年、一七七～一八〇頁。

⑬崔仁鶴「こぶとり爺」「朝鮮昔話百撰」日本放送出版協会、一

九七四年、一九八～二〇〇頁。

⑭朴榮濬「ふたつのこぶ爺さん」「韓国の民話と伝説 古代編」韓国文化図書出版社、一九七五年、七三～七六頁。

⑮「瘤取りに行つて瘤付けられた人」1-2京畿道驪州郡

⑯「瘤取りに行つて瘤付けられた話」3-1忠清北道忠州市

⑰「瘤取りに行つて瘤付けられた話」3-2忠清北道清州市

⑱「瘤取りに行つて瘤付けられた話」4-1忠清南道唐津郡

⑲「瘤取りに行つて瘤付けられた話」5-3全羅北道扶安郡

⑳「トケビと瘤爺さん」7-16慶尚北道龜尾市長川面

以上、先に取り上げた昔話集の事例及び、「韓国口碑」に収録されている「瘤取爺」総数二〇話の事例のすべてをまとめ、【表】（韓国昔話「瘤取爺」の事例比較表）を作成した。

四 昔話「瘤取爺」の日韓比較

日韓の伝承の比較によって、次のような点が指摘できる。

(1) 隣人との対立関係

両国の昔話とともに、瘤のある爺が山に行き、出会った異界の存在によって瘤が取り除かれるのだが、真似をした隣の爺は失敗し、もう一つの瘤も付けられてしまうという構成が共通している。

【表】(韓国昔話「瘤取爺」の事例比較表)(○番号は、採録報告事例番号を、▲は、意図のない嘘を表す)

	発端			展開			結果
	主人公	異界の存在	動機	宴詞歌嘘	瘤	理由	
①	瘤を頬に下げたる老爺・町内の老爺(頬の下)	異種異形の妖怪	偶然(主人公の)歌を聞く		売る(種々の宝と交換)	嘘・嘘がばれる	(瘤取られ・付けられた)
②	正直なお爺さん(頬)・不正直で意地悪いお爺さん(頬)	赤鬼・葵鬼や様々な鬼	偶然歌を聞く	○	報償(宝物の箱)・散々殴りつけられる	嘘・嘘がばれる	
③	正直な翁(右頬)・欲の深き翁(顔)	妖怪	偶然歌を聞く	○	報償(多くの宝)	嘘・嘘がばれる	
④	一人の男(頬)・隣の欲深い男	長丞	夢の中で、長丞を助ける		目が覚めると、瘤がなくなっている	恩返し	
⑤	真面目な老爺(あごの下)・欲深い隣の爺	トケビ	偶然聴き、楽しく踊る	○	売る(宝貨、大きな富者になる)	嘘・嘘がばれる	
⑥	片一方に瘤もつ爺	鬼	偶然歌を聞く	○	宝物と交換	嘘・嘘がばれる	
⑦	老人(首に長い瘤)・後半無し	トケビ	偶然歌を聞く	○	報償(金銀宝貨)	トケビの勘違い	
⑧	老人(首に大きい瘤)・後半無し	トケビ	偶然歌を聞く	▲	報償(立派な金銀宝貨)	トケビの勘違い	
⑨	爺(頬)・同じ村に住む爺	トケビ	偶然歌を聞く	○	宝物と交換	嘘・嘘がばれる	
⑩	爺(首)・隣の村に住む爺(首)	頭に角のあるトケビ	偶然歌を聞く	○	売る(宝物が入った袋)	嘘・嘘がばれる	
⑪	爺(片頬)・隣の村に住む爺	トケビ	偶然歌を聞く	○	宝物と交換	瘤を付けられる	

⑫	爺（右類）・隣の爺（左類）	トケビ	楽しく遊ぶトケビ群れに入って歌って踊る	○	質	（歌が）上手・下手
⑬	お爺さん（片方のほっぺた）・隣の村に住む爺	トケビ	偶然歌を聞く	○	報償（宝物）	嘘・嘘がばれる
⑭	爺（右下の顎）・同じ村に住む爺（左下の顎）	鬼	鬼の宴を見て我慢できず、仲間に入って踊る	○	質	（歌と踊りが）上手・下手
⑮	ある人（類）・ある者	トケビ	偶然歌を聞く	○	勝手に取って帰る	嘘・嘘がばれる
⑯	貧しい金氏（本来、歌が上手）・金持ち崔氏	トケビ	歌にはれたトケビたちが集まって、楽しく踊る	○	報酬（金銀宝貨）	嘘・嘘がばれる
⑰	田舎の農夫・隣の人	トケビ	主人公の歌に感動		トケビの棒をもらう	（歌が）上手・下手
⑱	優しい人（本来、歌が上手）・隣の意地悪い人	トケビ	歌を聴いて楽しく踊る	○	報酬を要求（トケビの棒をもらう）	嘘・嘘がばれる
⑳	爺・隣の爺	トケビ	仲間に入り、歌い踊る	○	報償（お金）	嘘・嘘がばれる

韓国の場合、⑤『朝鮮童話大集』⑫『昔話選集』など、総七話にみえる話末評語の内容を見ると、「それで「瘤取りに行つて、瘤付けられた」という話ができたと、ことわざの由来に関する説明があり、『宇治拾遺』第三話の話末評語や、日本昔話のような、人を

つまり、日韓双方とも主人公と隣人との関係が必ず善悪の対立を伴うわけではないことも同様である。

羨んではいけないといった教訓とは全く異なる。それに、日本昔話

（2）異界の存在との出会い

「瘤取爺」の場合は、『宇治拾遺』第三話と同様に、主人公の踊りが上手か下手かによって結果が異なる、という事例がはるかに多い。

韓国昔話では、祭や宴の場面が極めて少ないが【表】⑫⑭番事例のみ）、日本昔話では多くの事例に宴の場面が登場していることが確認できる。これは鬼と男との出会いかたの違いから発する。韓

国昔話は、主人公が夜中に山中で一人になった時、その怖さを抑えるため歌を歌う。すると、偶然その歌を聞いた異界の存在は感動し、上手に歌える原因に好奇心を持つことが発端となる。これに対し、『宇治拾遺』第三話や日本昔話「瘤取爺」では、鬼などの宴があり、興に乗った主人公が積極的にその場に入り込んで一緒に遊ぶという設定を基本とする。その場合、爺はもともと歌や踊りが好きであり、上手であったとされることになる。このように異界の存在を楽しませる方法として、日本昔話「瘤取爺」は歌や踊りが中心である。

なお、『宇治拾遺』では、鬼たちの宴を見た主人公が、

「しかるべく神仏の思はせ給けるにや、「あはれ、走出て舞はばや」と思ふを、一度は思かへしつ。それに、何となく、鬼どもがうちあげたる拍子のよげに聞こえければ、「さもあれ、たゞはしりいでて、舞てん。死なばさてありなん」と思とりて」

と、一度は気持ちを抑えたものの、結局は鬼たちの仲間に入って踊るといふ、鬼たちの宴に入り込むまでの主人公の心理的曲折を描いている。そこには、様々な人間に深い興味を持っていた編者の「おのずからにじみ出ている人間理解の独自性」が読み取れて、『宇治拾遺』の特徴の一つとされる「人間の描写の特性が見出される」と、言えよう。

(3) 歌は瘤から出るといふ発想と主人公の嘘
韓国昔話では、上手な歌声はどこから出て来るのかという、異界からの存在(トケビ)による質問があり、主人公がどう対応したかが基本となる。

1 「老爺はもはや氣丈夫なれば、さればとよ大王の見らるゝ通り、我は此の処に大きやかなる瘤を持てり、これこそ我が声溜め所よと答へたれば。」
〔朝鮮の物語集附俚諺〕

2 「お爺さんは鬼共を見て吃驚したが、ふと何やら思ひ付いたと見えて笑ひながら、その鬼の頭に向ひ、「私のよい声は此顔の瘤から出るのだ」といひました」
〔東洋の巻(第一部 朝鮮童話)〕

3 「爺は出鱈目に「私の顔にある大きな瘤から此の美しい声が出るのである」と答へた」
〔朝鮮の奇談と伝説〕

4 「あごの下に付けられている瘤から出ます。この瘤さえあれば上手に歌えることができます」と言った」
〔朝鮮童話大集〕

5 「老人は笑いながら「首(喉)から出るに決まったでしょう」と言いながら、からからと笑った。すると、頭のトケビは「お爺さん、嘘言わないで、お爺さんの美しい声はきつとその大きな瘤から出るに違いない」と言った」
〔朝鮮伝来童話集〕

6 「喉から出るんだ」と老人が答えたところ、「お爺さん、嘘言わ

ないでください、普通の声なら喉から出るんだけど、そんな美しい声は決して声から出るわけない、爺のその大きな瘤から出るじゃないですか」
〔朝鮮語読本〕

7 「お爺さんは誇らしげに「これを見て、ここにある大きな瘤を見てみて、ここから美しい歌が出るんだ」と、平気で言った」

8 「お爺さんは、トケビはこの瘤って、何だか分らないはずだから、歌が入った袋だと言ったら面白がるかも」と思った。「友よ、私の歌が出て来るところを教えてあげるよ、私の歌は、この歌の袋（瘤）から出てくるんだ」
〔伝来童話集〕

9 「お爺さんは威張りながら「これを見て、ここにぶら下げている瘤を、ここから（歌が）出るんだ」と、瘤を指した」
〔韓国伝来童話全集〕

10 「他の人より歌が上手いのは、この瘤からその歌声が出るからだよ」実際トケビたちが見てみると、他の人には付いていない瘤があつて歌も上手だから、瘤から歌が出て来ると言う彼の話は確かだと思つた」
〔韓国口碑3-1〕

韓国昔話はほとんどの事例に、歌声はどこから出て来るかと尋ねるトケビに対して、主人公は、歌声は瘤からだと言っている。

それに、トケビは嘘をそのまま信じ、宝物をもつて瘤を買い求め

ている。主人公の異界の存在に怖がらず、平気で嘘を言い、自分の利益を得ようとする行動から、主人公もつとトケビに対する印象が読み取れる。

韓国トケビの特徴について、李元寿氏は「歌の袋」〔表〕^⑩番事例)の解説において、「外国の化け物よりも人間的で、無邪気な面がある。それほど、トケビは恐ろしいものとしてよりも、面白くて親しいもの」とし、トケビは一般に、「いたづらを好み、人を惑わして嫌がらせもするもの、うまく付き合ふと、その靈験な力で財宝をもたらずなど奇跡的な助けを与えることもある」^⑪存在であることが知られている。さらに、任哲宰氏は、韓国説話の中に登場するトケビの特徴について、

宝物を限りなく持つて、願うものなら何でも出て来る（魔法の）棒を持っている。また、食べはお酒を飲んで楽しく遊ぶのが好きで、人間とは親しい関係だが、人によく騙される間抜けな面もある存在となっている。そして、裏切られたらお返しにするものの、その報復の手段や方法は、精巧・巧みでもなく、直截的でお愚かなにきわまらない。そのためか、トケビは超自然的な靈験の力を持つて、人の願いを叶えてくれるものの、人はそれを崇め尊ぶのではなく、馬鹿にしてだまそうとする^⑫

と述べている。つまり、韓国のトケビとは、日本のお化けや鬼に比

べ、恐ろしい存在ではなく、財宝をもらえる対象というイメージをもっている。それに対し、日本昔話や『宇治拾遺』第三話における鬼は、人に呪福をもたらす神格に近い。

なお、【表】⑤と⑥番の場合、喉と首のことを同じく「号」^{モック}ともいう韓国語に対するトケビからの勘違いから生じたものだと思う。爺さんは、トケビはこの瘤って、何だか分からないはずだから、歌が入った袋だと言ったら面白がるかも…と思った」という主人公の心理など、韓国の事例にみえる主人公の嘘の場面には、それほど悪い印象が感じられないことも特徴である。一方、『宇治拾遺』第三話では、「たゞ目鼻をは召すとも、このこぶだけはゆるし給候はむ。年比持て候物を、故なく召されむ、ずちなき事に候なん」と、嬉しい心を隠して嘘を言う。有利にことを運ぼうとする力点の置き方が異なるのである。

(4) 瘤を売る(または、お返しがある)

韓国昔話の特徴として、瘤から歌が出るということ聞いた後のトケビの対応についてみておこう。

1 「妖怪さらばいかでその瘤を我に売り玉へとて、種々の宝共を持ち出で交換してけり」
〔朝鮮の物語集附俚諺〕

2 「妖怪は「然らばドウかして其の瘤を買って貰ひたい」と云つて、多くの宝を持ち出して其の瘤を爺の顔から無理に取り去ってしまった」
〔朝鮮の奇談と伝説〕

3 「トケビは嬉しい顔で、「そうか、そんな良いものを一人だけ持たずに、金銀宝貨ならたくさんあげるから、私に売ってくれ」と頼むのであった」
〔朝鮮童話大集〕

4 「きつと瘤から歌声が出るに違いません。お爺さん、難しいとは思いますが、その瘤、私たちに取ってくれませんか、代わりに良いものを牛や馬に乗せてあげますから」と、願うのであった」
〔朝鮮伝来童話集〕

5 「お爺さん、難しいとは思いますが、その瘤、私たちにくれませんか、くれるなら、礼物をたくさんあげます」
〔朝鮮語読本〕

6 「頭のトケビは、何と自分もお爺さんのように上手に歌いたいと思っていたので、部下たちにたくさんの宝物を持って来いと命令した」
〔韓国伝来童話読本〕

7 「その歌の袋(瘤)、俺たちに売ってくれ。お金なら十分あげるから、俺たちに売ってくれ」
〔伝来童話集〕

8 「頭のトケビは、自分も瘤をもって美しい歌を歌いたいと思つた。それで、「何どうぞ、その瘤を私にくれませんか。宝物をた

くさんあげるから、交換しましょう」と言った」

〔韓国伝来童話全集〕

9 「そのこぶをおれに取れないか。もちろん、それに相当する宝物をいっばいあげるから」

〔朝鮮昔話百選〕

10 「この二つとも取って帰るなら、代わりに何か取れないかい」と聞いた。(略)「トケビの棒をあげるから交換しましょう」と言った」

〔韓国口碑4-1〕

これを見ると、トケビから瘤を売って欲しいという要求があり、瘤の代りに金銀宝物をもらう。または、叩くと願いを叶えてくれるトケビの棒など「お返し」をもらうという展開を基本としている。

特に、【表】の⑩番の事例の場合、主人公の方から「この瘤の変わりに何か取れないか」と、積極的に「お返し」を要求するという設定も興味深い。日本昔話には、群馬県利根郡新治村伝承の場合、鬼の側から「この中にいい声の出るたねが入っていつにちげえねえ。」と、瘤を声が出るところだと勘違いするか、群馬県利根郡新治村伝承の場合^④は、頭の天狗から、なぜそんなよい声が出るのかと聞かれた時、自分の瘤を指しながら、「こんなものが、あるせいだから、何だか、ありがたい事には、とつてもよいう声が出ますよ」と、嘘をつくなど、瘤は歌声が出てくるところだという設定の事例がみられる。一見すると、韓国の事例と似ていると言える。しかし、そ

れは、あくまでも、再びお爺さんを招くために、質として預けておくためであり、私の知る限り、日本昔話には「瘤を売る」という場面は見当たらない。ほか、実際に「売る」という表現は使われないが、上手な踊りに対するお礼や報いとして、金銀宝をもらうとある事例は確認できる。^⑤

五 日韓比較の論点

同じ話型をもつ『宇治拾遺』第三話及び日本昔話と、韓国昔話の三者について比較を試みると、三者の共通点、相違点を次のように整理することができる。まず、日韓昔話及び『宇治拾遺』の説話と三者の同質性を話型に求めると、

主人公は、異界の存在によって瘤を取られる。

隣人は、異界の存在から瘤を付けられる。

という単純で対照的な枠組みが共有されていることが確認できる。問題は、なぜ、どういう仕掛けによって災厄の除去もしくは祝福の獲得が可能になるのかをどう説明するかという点に違いがあることが分かる。すなわち、日本と韓国という異なる地域性や伝承の歴史性によって表現に異なりが生じたものと捉えることができる。

日韓両国ともに、「瘤取りに行って、瘤付けられる」という設定からみると同じようだが、モチーフを詳しく分析してみると、日韓

の「瘤取爺」ははっきりとしたモチーフで対比的に構成されている。²⁸⁾

瘤を取るということを目的とするだけなら、韓国の場合、【表】の収録された話の結末から考えると、最後の結論としては、トケビによって金持ちになるといことだと考えられる（二十事例の中、十五の事例が瘤を売るか交換することによって、宝物やお金をもらっている）。これは、「旁包説話」及び、韓国の昔話「トケビの棒」に共通するモチーフである。つまり、結末のところ、主人公はトケビのくれる棒や宝物によって裕福になるといことだ。発端部分において、韓国昔話では、偶然主人公の歌を聞いた異界の存在は、その歌に合わせて楽しく踊り遊ぶ。要するに、異界の存在の遊びは上手な主人公の歌により始まるのである。一方、日本は、主人公から積極的に鬼の開く宴に入り込み、上手に踊ることによって、参加者となることができる。

そのため、日本の場合には宴を開く際、必ず爺が宴に参加しなければならぬ。そのために、質を預けておく必要があったらう。一方、韓国の場合、瘤は美しい歌声が出てくる歌の袋とあるため、瘤さえ持っていればいつでも歌うことや聞くことができるので、瘤を招く必要がない。したがって、質として瘤を預ける必要もない。つまり、韓国昔話では、瘤を取る・取らないが最終の課題ではなく、瘤は主人公が裕福になるための手段なのである。

すなわち、宝物を与えても買い求めるほどの美しい歌声と上手な踊り、それに、命をかけても入り込みたくなるほどの宴の場面が必要であったと考えられる。それゆえ、韓国昔話は富を得ることができする方法の一つとして「瘤を売る」という設定が必要だったのでなかろうか。

日本の昔話に鬼は、集団で登場する。例えば、佐々木喜善の『聴耳草紙』に掲載されている「瘤取爺」（その一）の事例では、爺は瘤を取ってもらおうと「山の神様」に願をかけて「夜籠り」をする。すると、「賑やかな笛大鼓の囃の音」とともに「天狗」たちが現れる。「神楽」には「舞い手」が必要だ、と舞った爺に喜んだ天狗は、爺の瘤を取る。「瘤取爺」（その二）の事例でも、柴刈に出掛け日が暮れて困った爺は、「山ノ神様の御堂」に入って泊まる。すると、鬼たちが現われ、鬼の歌にうまく歌を「つけ加えた」爺は、「一絡に」なつて「踊り」まわる。すると、鬼たちは「明日の夜」も来いと瘤を預かる。いずれも、顕現する鬼は神の位置に立つ。神に対する祭祀の中で呪福を授かるという基本的な枠組みが働いている。昔話の鬼たちが出現する神遊びの祭は、『宇治拾遺』においては、貴族社会の饗宴として描かれる。したがって、日本昔話でも『宇治拾遺』でも、爺または翁は、祭祀や儀式的な場に参加できるかどうか重要である。日本昔話と比べると、『宇治拾遺』では、宴という

祭祀の場が作り出される。そこでは鬼は、民俗学にいう神聖な「横座」に迎えられる神格を帯びている。「横座の鬼」を喜ばせるように、舞や踊りが奉納される必要がある。すなわち、宴において踊りや歌が不可欠である。爺の踊りや歌は鬼を喜ばせることが必要である。そのためには、鬼と人とが舞い踊る場を共にする宴が必要だったといえる。

以上の考察により、日韓の伝承について比較の論点を整理すると次のようである。

(1) 韓国昔話の場合、男が美しい歌声で歌う必要があるが、日本昔話及び『宇治拾遺』では、上手な踊りが必要である。

(2) 日本昔話では、神として鬼や天狗の出現する祭が必要であり、

『宇治拾遺』では、主人公が入り込む宴の設定が必要である。

(3) 『宇治拾遺』では、主人公が宴に入り込む躊躇と勇氣ある決断が描かれている。

(4) 韓国昔話の場合、歌声は瘤から出るといふ発想が特徴である。

(5) 韓国昔話の場合、瘤を売ることと、お返しがあることが対照的に語られる。日本昔話と『宇治拾遺』では、鬼や天狗が主人公から、質として瘤を預かるという形で瘤が取り除かれる。

(6) 日本昔話や『宇治拾遺』では、瘤を取ってもらうことを目的とするなら、韓国昔話では金持ちになることを目的とする。

この中で、特に重要なモチーフは、韓国昔話の場合、男が美しい歌声は瘤から出ると嘘を言つて瘤を売ろうとすることである。瘤の変わりに金銀宝物を手に入れることもある。それは、異界の存在からの提案を基本とするが、男から積極的に要求する場合もある。つまり、韓国昔話「瘤取爺」の特徴は、瘤から歌が出るという発想の特異さとともに、その瘤を売つたり、さらに瘤を取られた代りに、金銀宝物などといった補償を求めたりすることにある。

一方、日本昔話では、主題が危機の回避や災厄の除去、もしくは富の獲得にある。とすれば、日本昔話「瘤取爺」や『宇治拾遺』第三話では、幸や福の獲得を究極の目的とするよりも、災厄の除去が重要な課題となつてると同時に、特に『宇治拾遺』第三話では、結末に至るまでの説明や、主人公の心理の描写が顕著である。もちろん幸運へのきっかけは、鬼の登場によって向こう側の世界からもたらされるのだが、翁が思い切つて自分の意志で鬼の宴に飛び込んで行くところに特徴があり、これは『宇治拾遺』の説話が、神に対して人が積極的、行動的に働きかけるといふ意味で、中世という時代の表現であることとかわつてきているだろう。また、異界の存在である鬼が翁の瘤を取ろうとした時、「たゞ、目鼻をは召すとも、このこぶだけはゆるし給候はむ」と、翁は嬉しくてたまらない内心を隠して、相手に瘤はもつと価値のあるものだと思わせる、かけひきの

言葉の巧みさをこらしている。このような主人公の才略や狡智や瘤が取られるまでの会話のやりとりに『宇治拾遺』のおもしろさがあり、中世説話集としての『宇治拾遺』のひとつの特徴であるといえる。

注

- ① 金恩愛「『宇治拾遺物語』『雀報恩事』考——韓国昔話をめぐって——」『同志社国文学』第七三号、二〇一一年三月。
- ② 浅見和彦・三木紀人校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年。以下、『宇治拾遺物語』の本文はこれに拠る。
- ③ 大島建彦「宇治拾遺物語と昔話」『説話文学研究』第一二号、一九七七年。
- ④ 中島悦次『宇治拾遺物語・打開集全註解』有精堂出版、一九七〇年。
- ⑤ 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九五八年。
- ⑥ 廣田收「『宇治拾遺物語』第三話——構造からと、表現からと——」『入門説話比較の方法論』勉誠出版、二〇一四年。
- ⑦ 『睡隠集』は、朝鮮時代の学者姜沆（一五六七～六一八年）が、慶長の役のとき、日本の捕虜になった（一五九七年から二年八ヶ月）後、日本での捕虜生活や日本について書いた詩文集のこと。
- ⑧ 高木敏雄「日韓共通の民間説話」『東洋文庫 増訂日本神話伝説の研究』第二卷、平凡社、二〇〇二年。
- ⑨ 島津久基「瘤取」『国民伝説類聚』大岡山書店、一九三三年、七六頁。
- ⑩ 野村八良「瘤取」『国民童話』国史講習会、一九三二年、一〇九頁。
- ⑪ 高橋亨「瘤取」『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房、一九一〇年。
- ⑫ 金宗大「瘤取り爺の形成過程に関する試考」『韓国文学研究』二〇号、韓国文学会、二〇〇六年。
- ⑬ ①方定煥「新たに開拓なる童話に関して——特に少年以外の一般の大人に——」『開闢』第四卷一号、一九三三年一月。
- ⑭ ②金容儀「日本「瘤取爺」話の類型と分布」『日本語文学』第五卷、韓国日本語学会、一九九八年、一六三頁。
- ⑮ 崔仁鶴「韓国昔話の研究」弘文堂、一九七八年。
- ⑯ ③韓國精神文化研究院編『韓国口碑文学大系』韓国精神文化研究院、一九八〇年。
- ⑰ 廣田收「瘤取爺」類話考——話型と表現の異同をめぐって——『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年、一六七頁。
- ⑱ 廣田收「宇治拾遺物語」『瘰取爺』考』同志社大学『人文学』第一六七号、二〇〇〇年。
- ⑲ 渡邊綱也・西尾光一校注『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九七二年、三〇三頁。
- ⑲ 注④に同じ、三二頁。
- ⑲ 李元寿「歌の袋」『伝来童話集』現代社、一九六三年、四八〇頁。
- ⑲ 東亜出版大百科事典出版部『東亜原色世界大百科事典』東亜出版社、一九八三年。
- ⑲ 任哲宰「説話の中のトケビ」『国立博物館叢書1 韓国のトケビ』悦話堂、一九八一年、五二頁。
- ⑲ 「こぶとり」須藤澄子『おばあんの昔話——細川にきのむかしばなし』煥乎堂、一九八〇年、一四〇頁。
- ⑲ 「二四 瘤取り」上野勇『全国昔話資料集成13 利根昔話集』岩崎美術社、一九七五年、六四頁。

- ②⑤ ①「瘤取爺」国学院大学民俗文学研究会『岩手県南昔話集』（伝承文芸 第六号）、一九六八年、四六頁。
- ②「こぶ取り爺」京都女子大学説話文学研究会『金山町の昔話』金山町教育委員会、一九八二年、五四頁。
- ③「瘤取爺（類話1）」稲田浩二・立石憲利『昔話研究資料叢書8 奥備中の昔話』一九七三年、二八〇頁。
- ④「70 こぶ取り（類話2）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋舎出版、一九八六年、一四二頁。
- ⑤「瘤取り爺（類話1）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第17巻 鳥取』同朋舎出版、一九七八年、二七五頁。
- ②⑥ 張貞姫「瘤取爺さん」譚の韓日間の説話素の比較と原型分析』『国学研究』第四二巻、高麗大学国学研究所、二〇二二年、三八一頁。
- ②⑦ 佐々木喜善『聴耳草紙』筑摩書房、一九六四年、一一九―一二頁。